

“Memphis Blues Again”の少年の行方

— 「刑務所」を意味するいくつかの
言葉から Bob Dylan を考える —

三 浦 久

1992年10月16日、ニューヨークのMadison Square Gardenに、多くの偉大なアーティストたちが集合した。その中にはGeorge Harrison, Eric Clapton, Neil Young, Willie Nelson, Roger McGuinnが含まれていた。彼れらがそこに集まったのは、Bob Dylan のデビュー 30周年記念コンサート(The 30th Anniversary Concert Celebration)に参加するためであった。参加したアーティストの顔ぶれだけでも、Dylanの偉大さが推測できる。30年以上活動し続けている singer-songwriter は Dylanの他にいないわけではない。しかし、Dylanほどに、時代の節々に先駆者的な働きをし、多くのアーティストに影響を与えた者はいないだろう。

筆者は以前に「ボブ・ディラン— “Death Is Not the End” について¹」というエッセイで、Dylanの創造性を喚起しているものは「彼の死に対する恐怖」であり、「彼の夥しい数の作品は、死の呪縛（そしてあらゆる種類の間諷外）からの救済の探究の後に残された足跡、血の轍である」と述べたことがある。その考えは今でも変わっていないが、この小論においては、別の角度から彼の作品に光りをあててみようと思う。

「死」のテーマが彼の、特に初期の、作品に頻出するが、LYRICS, 1962 — 1985²を通読して気づくのは、prison, jail, penitentiaryといった「刑務所」を意味する言葉もきわめて多いということである。Robert SheltonもNo

Direction Home の中で “the physical or spiritual prisoner contemplating imprisonment and deliverance” は “a recurring Dylan subject”³ であると指摘している。この小論は、「刑務所」を意味するいくつかの言葉を通して、Dylan の作品を検討しようとする試みである。

1

Bob Dylan が一躍世に知られるようになったのは、彼の second album に収められている “Blowin’ in the Wind” によってである。この歌は60年代初期の公民権運動の anthem として多くの集会や行進で歌われた。The 30th Anniversary Concert Celebration でこの歌を歌った Stevie Wonder は次のように述べた— “Now the significance of this song to me is that it’s a song that will last unfortunately for a long time. When I say unfortunately I’m talking about the fact that it will always be relevant to something that is going on in this world of ours. In the 60’s the song related to the civil rights movement and the war in Vietnam, the 70’s, Watergate and Stephen Bico and the suffering in South Africa, in 80’s still relevant to the fighting against apartheid in South Africa and the fighting to end starvation. Today in the 90’s the song is still relevant...”⁴

“Blowin’ in the Wind” の中で、Dylan は9つの問を発しているが、この小論との関連において重要な問は 3rd verse の How many years can some people exist / Before they’re allowed to be free? である。「自由になることを許されるまでに、ある人たちは何年生き続けることができるのか」というこの問の「ある人たち」とは、広い意味では自由を束縛されているすべての人々のことを意味しているように思われるが、1st verse の最初の問 How many roads must a man walk down / Before you call him a man?

(ひとりの人間として認められるまでに、人はいくつの道を歩かなければならないのか)において、差別と偏見の中で人間と認められていない人たちに言及していることを考えると、「ある人たち」とは、政治犯として、あるいは無実の罪で、投獄されている人たちであると考えらるべきであろう。prisonあるいはjailという言葉は使われていないが、明らかに「刑務所」が示唆されている。

60年代初期、Dylan は protest singer あるいは topical songwriter と呼ばれ、社会の矛盾を激しく糾弾する作品を数多く残した。この時期の作品に登場する「刑務所」は比喩的、象徴的なものではなく現実の刑務所である。Lyrics 1962 ~1985の中で最初に出てくる刑務所は album 未収録の“Gypsy Lou”である。Well, the last I heard of Gypsy Lou / She's in a Memphis calaboose. (最後にジプシー・ルーの話聞いた時、彼女はメンフィスの刑務所にいるとのことだった) この作品は初期のDylanの特徴のひとつである「悪ふざけ」の歌であり、「刑務所」という言葉の持つ深刻さはない。だからこそ calaboose という俗語が使われているのかもしれない。

ジプシー・ルーが刑務所に入れられたのは、自由奔放な彼女に捨てられた男が自殺したからで、彼女の責任ではない。それはむしろ彼女が魅力的な女であるということを実際たせる役割を果たしている。しかし次の“Ballad of Donald White”になると様相は一変する。ドナルド・ホワイトは窃盗の罪で投獄される。

If I had some education
To give me a decent start
I might have been a doctor or
A master in the arts
But I used my hands for stealing
When I was very young
And they locked me down in jailhouse cells

That's how my life began
ちゃんとした教育をうけて
人並みのスタートが切れてたら
医者になっていたかもしれないし
手に職をつけていたかもしれない
でもまだ若いころ
この手を盗みのために使ってしまい
刑務所に入れられた
そうやっておれの人生が始まった

この歌の irony は、ドナルド・ホワイトは刑務所の中に平和を見つけたことである (And it was there inside the bars / I found my peace of mind)。しかし、刑務所は増え続ける囚人を収容しきれずに、彼を釈放する。彼にとって、社会はきわめて危険な場所であった (And for me the greatest danger was in society)。そこで彼は刑務所に戻してくれるように頼むが受け入れられず、1959年12月24日、人を殺し逮捕される。そして裁判にかけられ、死刑を宣告される。last verse で彼は訴える。彼のように罪を犯す若者たちは、社会の敵なのか犠牲者なのか (Are they enemies or victims / Of your society?)。

ドナルド・ホワイトは社会に適合することができず、刑務所の中に平和を見出したが、最終的には死が彼を解放した。まさに社会は彼にとって「刑務所」そのものであった。社会が「刑務所」であり、死によって解放されるというテーマは、3rd album, *Times, They Are A-Changing* 中の “Ballad of Hollis Brown” と、ほぼ同じ頃にかかれたが album には収められていない “Only a Hobo” の中にも見ることができる。ドナルド・ホワイトと違って、ホリス・ブラウンも “Only a Hobo” の「浮浪者」も罪を犯したわけではない。前者は失業し、何日も職探しに歩いたが、徒労に終わる。最後に残った一ドルでショッ

トガンの弾を買い、親子七人心中する (There's seven breezes a-blowin' / All around the cabin door / Seven shots ring out / Like the ocean's pounding roar)。後者は、路上で死んでいるのが見つけれられる。道路のベッドに、新聞紙の毛布。枕は縁石だった。手には恵んでもらった何枚かの硬貨が握られていた (A blanket of newspaper covered his head / As the curb was his pillow, the street was his bed / ... / And a fistful coins showed the money he bummed)。

ドナルド・ホワイトと彼らの間の違いは紙一重であり、わずかな状況の変化によって、立場が逆転していたとしても不思議ではない。「彼らは社会の敵なのか犠牲者なのか」という問に対する答えは明らかである。

この頃の Dylan の社会と「刑務所」に対する stance がよく表されている作品に “Walls of Red Wing” がある。ただし Red Wing は刑務所ではなく少年院である。この施設に入れられている者たちの年齢は12歳から17歳で、彼らは無法者や犯罪者のようにレッド・ウイングの壁の中に閉じ込められていた (Oh, the age of the inmates / I remember quite freely / No younger than twelve / No older'n seventeen / Thrown in like bandits / And cast off like criminals / Inside the walls / The Walls of Red Wing)。なぜこの少年たちがこの施設に入れられるようになったかについて、この歌はいかなる手掛かりも与えてくれないが、言葉の背後に、彼らが社会の犠牲者であるということがほのめかされている。

この他、初期の作品の中で「刑務所」という言葉がでてくる作品はもう二つある。ひとつは “Seven Curses” で、もうひとつは “Percy's Song” である。

“Seven Curses” は、権力の犠牲になった父と娘の話である。Reilly という男が種馬を盗み捕まる。彼は首に鉄の鎖をかけられ、刑務所に連れてこられる (Old Reilly stole a stallion / But they caught him and they brought him back / And they laid him down on the jailhouse ground / With an iron chain around his neck)。Reilly の娘は父親が絞首刑になるという

報せを受けて、金と銀を持ってはるばる馬に乗ってやって来る。裁判長が彼女を見て言う、「いくら金をつんでも、父親は釈放されない。おまえの身体で払うのなら話は別」(Gold will never free your father / The price, my dear, is you instead)。父親は娘に馬に乗って逃げるように言うが、娘は父を救いたい一心で裁判長に身をまかせる。翌朝、娘が目覚めた時、約束は破られ、父親は枝に吊るされ息絶えていた(The next mornin' she had awoken / To know that the judge had never spoken / She saw that hanging branch a-bending / She saw her father's body broken)。

“Percy's Song” は交通事故を起こし、四人を殺したということで、懲役99年の刑を言い渡された男の友人が語るという体裁を取っている。この男をよく知る友人は、裁判長に彼は心優しい男であり、人を傷つけるような人ではないと訴え(But I know him as good / As I'm knowin' myself / ... / And he wouldn't harm a life), 刑を受けるのは仕方ないとしても、99年は長すぎると主張する(That may be true / He's got a sentence to serve / ... / But ninety-nine years / He just don't deserve)。しかし、裁判長はこの裁判は結審し、判決を覆すことはできないと言う(Too late, too late / For his case it is sealed / ... / His sentence is passed / And it cannot be repealed)。結局、友人は、彼は犯罪者ではないし、彼に起こったことは誰にでも起こりうる(But he ain't no criminal / And his crime it is none / ... / What happened to him / Could happen to anyone) と確信しながらも、引き下がる他に仕方がなかった。

LYRICS, 1962—1985の123 ページまでの作品の中で、「刑務所」という言葉や、明らかに「刑務所」を意味する表現のあるの歌を検討してきたが、Dylan は、その理由がなんであれ、「刑務所」の中に入れられている人たちに対しては sympathy を抱き、彼らを投獄した社会や状況に対しては批判的である。この時期の Dylan の「刑務所」に対する姿勢は、political (政治的) あるいは social (社会的) であると言うことができるだろう。この後にも、「刑

務所」が、この時期と同じレベルで扱われたことがなかったわけではない。しかし“George Jackson”（1971年）が発表された時も、“Hurricane”（1975年）が *Desire* に入れられた時も、Dylan がプロテストソングに戻るのではないかという期待とともに、そのことが大きな話題になったという事実が、それが例外的なことであったということを示している。

2

「Bob Dylan の作品における宗教性—神秘主義と根本主義の間」⁵ というエッセイの中ですでに言及したことがあるが、3rd album, *Times, They Are A-Changing* と 4th album, *Another Side of Bob Dylan* の間にはわずか半年の隔たりしかないし、ギターとハーモニカという演奏スタイルは同じであるにもかかわらず、その内容においては、かなりの違いがある。4th album の内容は、むしろ folk から rock に変わった次の3枚の album、*Bringing It All Back Home*, *Highway 61 Revisited*, *Blonde on Blonde* に近いと言えよう。

Another Side の内容の変化は、この時期 Dylan に起きた神秘主義的体験やケネディの暗殺などによって引き起こされたと考えられるが、ここではこの小論の主旨にそって、「刑務所」がこの album 以後どのように扱われているかを検討することによって、前述の political stage との違いを考察することにする。

Another Side 中の歌で、The 30th Anniversary Concert Celebration で歌われたものは“*My Back Pages*”のみである。コンサートの終盤、Dylan がソロで二曲歌った後、George Harrison, Tom Petty, Neil Young, Roger McGuinn, Eric Clapton が加わり、各 verse をひとりひとり歌った。

この歌は、難解な歌の多い Dylan の歌の中でもかなり難解なものであるが、その言わんとするところは明確である。“*Rip down all hate*”, *I screamed / Lies that life is black and white / Spoke from my skull...*(2nd verse).

“Equality” I spoke the word / As if a wedding vow (4th verse). Good and bad, I define these terms / Quite clear, no doubt, somehow (6th verse). (「すべての憎しみを引き裂け」とぼくは叫び、ぼくの頭骸骨は人生は白か黒だという嘘を話した) (「平等」という言葉をぼくは繰り返した、まるで結婚式の誓いのように) (善と悪、ぼくはこれらの言葉を定義する、まったく疑いのない明確なものであるかのように)。

これらの言葉から分かることは、Dylan 自身のかつての自分に対する soul-searching な反省である。白黒、善悪という表現から、すべてのことを二元的に見て、どちらか一方の側に立って、もう一方の側を攻撃していたじぶんを客観的に眺めている。5th verse の Fearing not that I'd become my enemy / In the instant I preach (あの頃は、説教し始めるその瞬間に、敵と同じになるなんてことは恐れていなかった) という二行から、この歌を書いた時点では、攻撃する瞬間に、攻撃している敵と同じになってしまうということに気づいているということが分かる。しかも「ぼくの頭骸骨が... 話した」「結婚式の誓いのように... 繰り返した」というところから、誰か他の人の言葉を、自分の言葉でもあるかのように語っていたという反省も感じられる。

その反省は「刑務所」という言葉の扱い方にも表れている。この album の中では、“Chimes of Freedom” と “Ballad in Plain D” の中に「刑務所」が出てくる。前者の場合は、5th verse の下から二行目、An' for each un-harmful, gentle soul misplaced inside a jail (刑務所の中に間違っ入れてられたすべての無害で優しい魂のために) の中に見られる。確かに、この jail は、現実の刑務所には違いないが、3rd album までのように、なにかを糾弾するという stance はきわめて希薄になっている。この歌の中には「刑務所に間違っ入れられた魂」ばかりでなく、「戦わないことが強さである兵士」(the warriors whose strength is not to fight)、武器も携帯せず逃げていく避難民 (the refugees on the unarmed road of flight)、「孤独な虐待されつづけた母親」(the mistreated, mateless mother)、「間違っ肩書をつけられ

た売春婦」(the mistitled prostitute)、「この全宇宙のすべての失意の底にある人たち」(every hung-up person in the whole wide universe)、つまり、ありとあらゆる疎外された人たちが登場する。この歌の中では、善悪、白黒をはっきり分けることはできない。敵も味方も共に「失意の底」にある。敵に向けていた矛先が自分に向けられた時、「誰でもない、この私のこの一回きりの人生をどのように生きるべきか」という実存的な問が生じてくる。

Ballad in Plain D の最後の verse の間も、その実存的な問につながっている。

Oh, my friends from the prison, they ask unto me
“How good, how good does it feel to be free?”
And I answer them most mysteriously
“Are birds free from the chains of the skyway?”

牢獄につながれた友達がたずねる
自由であるというのはいい気分だろうね
ぼくはとても神秘的に答える
空行く鳥は、空の鎖から自由だろうか

「鳥のように自由な」という表現があるが、ここにおいて Dylan は、刑務所＝不自由、鳥＝自由、という二元論をしりぞける。矛先は自らにも向けられる。敵も味方も「失意の底」にあり、刑務所の内にも外にも自由はない。出口なし。実存主義はその認識から始まる。

Another Side (1964) から *Street Legal* (1978) までの間の作品、つまり *LYRICS, 1962—1985* の pp.126~406 の間の作品は、紆余曲折はあるけれども、基本的には Dylan がこの実存的な問に様々な角度から答えようとしたものである、とすることができる。

この間の作品の中にも「刑務所」を意味する言葉は数多く出てくる。そして

前述の“George Jackson”と“Hurricane”を除いては、「刑務所」という言葉は、人間関係の束縛や、個人の尊厳を失わせるような状況に対する比喩的表現として使われている。同時に、chains (鎖), shackles (手枷), stuck (立ち往生して), stranded (途方に暮れて) 等の表現も頻出する。

ここではそれらのすべてを検討するわけにはいかないが、二つの作品を例にとって考えてみよう。7th album, *Blonde on Blonde* 中の“Stuck Inside of Mobile with the Memphis Blues Again”は、そのタイトルだけでも閉塞感が伝わってくるが、9つのverseのそれぞれが、現代の社会の喧騒と疎外された人間関係を描いている。1st verseの最後の5行—

But deep inside my heart
I know I can't escape
Oh, Mama, can this really be the end
To be stuck inside of Mobile
With the Memphis blues again
でも心の奥深く
わかっているんだ、逃げられないって
ママ、ほんとにこれでおしまいなんだろうか
メンフィスにいた頃の憂鬱な気分で
モービルの町で途方に暮れてる

最後のverseの中の4行—

An' here I sit so patiently
Waiting to find out what price
You have to pay to get out of
Going through all these things twice

そしてぼくはここにすわり

がまん強く待ってる、これらすべてのことを
二度経験しないですむために、どんな代償を
払わなければいけないか見つけだそうとして

all these things (これらすべてのこと) とは9つの verse で描かれている
さまざまな出来事である。円を描きながら通りを行ったり来たりしている屑拾
い (Oh, the ragman draws circles / Up and down the block)、先のと
がった靴をはき、鈴を鳴らしながら、フランス人の女の子を口説いているシェー
クスピア (Well, Shakespeare, he's in the alley / With his pointed shoes
and his bell / Speaking to some French girl)、息子の結婚式への無料招
待状を配る上院議員 (Now the senator came down here / ... / Handing
out free tickets / To the wedding of his son)、20ポンドのヘッドライン
を身につけた牧師 (Now the preacher looked so baffled / ... / With
twenty pounds of headlines / Stapled to his chest) 等が織りなすシュール
な世界は、とりもなおさずわれわれが住んでいる現実の世界の反映である。
それは退屈で、無意味で、同じことの繰り返しの世界である。その世界に存在
しつづければしつづけるほどの、内なる部分でなにかが崩壊していく。それは
憧れとも夢とも無縁な生、生というよりもむしろ死に近い生活である。“Deso-
lation Row” の4th verse 中の Ophelia の lifeless な生活である。

この歌の中の少年は、あるいは Dylan は、その無意味な繰り返しの人生の
中にうずくまることを拒否する。彼は問う、「これらすべてのことを二度経験
しないですむために」は、何をしなければいけないのか、「どんな代償を払わ
なければいけないのか」と。まさにこれは existential な問であり、その答え
は誰かから与えられるものではない。その答えは風に舞っている。

The 30th Anniversary Concert Celebrationにおいて Chrissie Hynde が歌っ
た “I Shall Be Released” は The Band の1968年の debut album, *Music*

from *Big Pink* に最初に収められた。Dylan の version は1971年の *Greatest Hits, Volume II* まで待たなければならなかった。

“I Shall Be Released” というタイトルからすでに「刑務所」のイメージが喚起される。さらに 1st verse の So I remember ev'ry face / Of ev'ry man who put me here (だからぼくをここに入れたすべての人の、すべての顔を覚えている) や、2nd verse の Yet I swear I see my reflection / Some place so high above this wall (誓ってもいい、ぼくには見えるぼくの姿が、この壁のはるか向こうに) からも「刑務所」のイメージが強化される。しかし、勿論、この「刑務所」はすでに述べたように、比喩的なものであることは言うまでもない。

3rd verse の最初の4 行—

Standing next to me in this lonely crowd

Is a man who swears he's not to blame

All day long. I hear him shout so loud

Crying out that he was framed

この孤独な群衆の中でぼくの横に立っている男が言う

誓ってもいい、俺には責任がないんだ

彼は一日中、俺ははめられたんだと

大声で叫びつづけている

孤独な群衆の中で「ぼく」の横にいる男は、「俺には責任ない」「俺ははめられた」と叫んでいる。彼はまだ、自他、善悪、白黒の二元の世界、「モービルの町」「刑務所」の中にいる。しかしそのことに気づいていない。existential な問を発するところまで来ていない。

一方、「ぼく」は壁のはるか向こうの自分の姿を見ている。だからこそ彼はそれぞれの verse の最後で、

I see my light come shining

From the west unto the east

Any day now, any day now

I shall be released

ぼくには見える、光りが射してくるのが

西から東へ

今にも、今にも

ぼくは自由になるだろう

と、歌うのである。しかしまた同時に、この横に立っている男が「ぼく」と同一人物であり、“Memphis Blues Again”の中の「少年」が、Can this really be the end / To be stuck inside of Mobile / With the Memphis blues againと歌い、自らが置かれている状況を客観視していたように、「ぼく」が自分自身のことを第三者として見ていると解釈することも可能である。第一期を political あるいは social と呼んだように、この第二期は philosophical (哲学的) あるいは existential (実存主義的) と名づけることができるだろう。いずれにしろ、「ぼく」も「少年」もまだ「刑務所」の外に出てはいない。外に出るためには、*Slow Train Coming* 以後の次の stage まで待たなければならない。

3

この第三期の中心にある三つの album, *Slow Train Coming*, *Saved*, *Shot of Love* については「Bob Dylan の作品における宗教性—神秘主義と根本主義の間」の中で論じているので、ここではこの小論のコンテクストの中で、*Saved* の中の二つの作品 “Saved” と “What Can I Do for You?” に言及するにとどめようと思う。

“Saved” は文字通り、救われた喜びと神への感謝が歌われている。2nd
verse の最後の4行—

He bought me with a price
Freed me from the pit
Full of emptiness and wrath
And the fire that burns in it
主は私を買い取って下さった
空しさと怒りと
燃えさかる火に満ちた地獄から
私を救い出して下さった

the pit は the hell と同義語であるが、「空しさと怒り」それに「燃えさかる
火」に満ちた地獄とは、我々が住むこの二元の世界であり、“Memphis Blues
Again”の「少年」が二度は経験したくないと考えている退屈で無意味な繰り返し
返しがつづく「モービルの町」「刑務所」である。

3rd verse の最後の2行—

For so long I've been hindered
For so long I've been stalled
とても長い間、ぼくは前に進めなかった
とても長い間、ぼくは立ち往生していた

この後に長いコーラスが続く—

I've been saved
By the blood of the lamb

Saved

By the blood of the lamb

Saved

Saved

And I'm so glad

Yes, I'm so glad

I'm so glad

So glad

I want to thank you, Lord

I just want to thank you, Lord

Thank you, Lord

ぼくは救われた

子羊の血によって

救われた

子羊の血によって

救われた

救われた

ぼくはとても嬉しい

そう、とても嬉しい

ぼくはとても嬉しい

とても嬉しい

主よ、感謝いたします

主よ、ほんとに、感謝いたします

ありがとうございます、主よ

憂鬱な気分で閉じ込められていた「モービルの町」「刑務所」から解放された喜びがよく表されている。これほどの歓喜を味わうためには、「とても長い間

立ち往生する」必要があるのかもしれない。絶後に蘇るためには「小死」ではなく「大死」が必要なのかもしれない。

“What Can I Do for You?” でも「刑務所」からの「釈放」が歌われる。
1st verse の最初の 3 行—

Pulled me out of bondage and You made me renewed inside
Filled up a hunger that had always been denied
Opened up a door no man can shut and You opened it up so wide
私を束縛から解放し、生まれ変わらせて下さいました
今まで満たされることのなかった飢えを満たして下さいました
ドアを広く開けて下さい、もう誰も閉じることはできません

You made me renewed inside—lifeless な「モービルの町」から抜け出した時、崩壊していた心の中のがかが修復されたのである。新しい自己に目覚めたのである。この段階における、Dylan の「刑務所」とのかかわりを religious（宗教的）と呼ぶことに異論はないであろう。

4

「刑務所」を意味するいくつかの言葉、そしてそれに関連する表現を通して Bob Dylan の作品を考察してきた。30年にわたる Dylan の活動、その間に生み出された40枚近い album を、三語に収斂しようとすることは無謀な試みであるかもしれないが、Dylan の作品は、political, philosophical, religious という三つの時期に分類することができるように思われる。しかし、それぞれの時期は独立しているのではなく、互いにオーバーラップしながら存在している。また、それぞれの時期は、Dylan の「死」との折り合いのつけ方のうちの何が dominant に表面化したかという違いによって特徴づけられているように思われる。言うまでもなく、三つの時期のそれぞれの中に他の二つの時期の

要素が内在している。

categorize されることを嫌い、常に「脱皮を繰り返し、内なる迫害者の一歩先を行く (Shedding off one more layer of skin / Keeping one step ahead of the persecutor within)」Dylan は、言うに違いない—「愚か者、おまえの貧しい頭の中に俺を閉じ込めようとするのか」⁶

注

All lyrics by Bob Dylan in this paper are quoted only as necessary in the context of critical analysis.

1. 信州豊南女子短期大学紀要 第6号 pp. 37~50
2. Bob Dylan, *LYRICS, 1962-1985* (Alfred A. Knopf, New York, 1985)
3. Robert Shelton, *No Direction Home* (New English Library, London 1986) p. 318
4. The booklet attached to *The 30th Anniversary Concert CD* (cs 6793~4) p. 24
5. 信州豊南女子短期大学紀要 第5号 pp. 27~50
6. *BIOGRAPH* (CBS/SONY, Tokyo, 1986) の Cameron Crow のライナーノートに Dylan の次の言葉が引用されている— “Fools, they limit you to their own unimaginative mentality.”